

大

学

2024

11

No.

419

時

報



| 特集 |

どうする? デジタル時代における大学広報

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2024(令和6)年11月20日発行 [隔月刊]

白百合女子大学



ルイ・ショーヴェ神父
(1664-1710年)



最初の修道院の地下に残る教室
ここが白百合女子大学の教育の原点である。神父のもとに集った娘たちは、後に「学校の娘たち」と呼ばれるようになった。



中庭のヒマラヤ杉と学生たち
開学時に植樹した約80cmほどの幼木は大学の歩みとともに成長し学生たちの憩いの場となっている。

白百合女子大学の教育 ― 社会課題に取り組む力といのちのスーパー

この4月、本学にルイ・シヨールヴェセンターが設置された。センターの名称は、シャルトル聖パウロ修道女会(Sisters of St. Paul of Chartres: SDC)を創立したカトリック司祭であるルイ・シヨールヴェ神父(1664-1710年)に由来する。シヨールヴェ神父は、1696年、フランスのシャルトル近郊のルヴェヴィル・ラ・シュナール村で、教会の司祭として学校教育活動に着手した。修道院の地下につくられた最初の教室は土間床と土壁でできており、四脚の椅子がようやく置けるほどの粗末で、小さな部屋であった。ここでシヨールヴェ神父は、3人の村の娘たちに読み書きと手仕事を教えた。これがSPCの始まりであり、白百合女子大学の女子教育の原点である。

シヨールヴェ神父の教育活動は、読み書きの教育に加え、フランス絶対王政下の寒村が抱えていた貧困や飢え、病気などの「社会課題」に取り組むための教育、すなわち地域の人々とともに在る教育であっ

た。学校の教師や生徒たちは勉強が終わると、皆でスープを作って病人や苦しむ人々のもとへ向かった。それは「いのちのスープ」を届ける活動であり、隣人に寄り添う教育でもあった。シヨールヴェ神父がめざしたのは、厳しい社会環境の中にあっても人間の尊厳を守り、生きる意味を考え、与えられたいのちを生ききる教育であった。

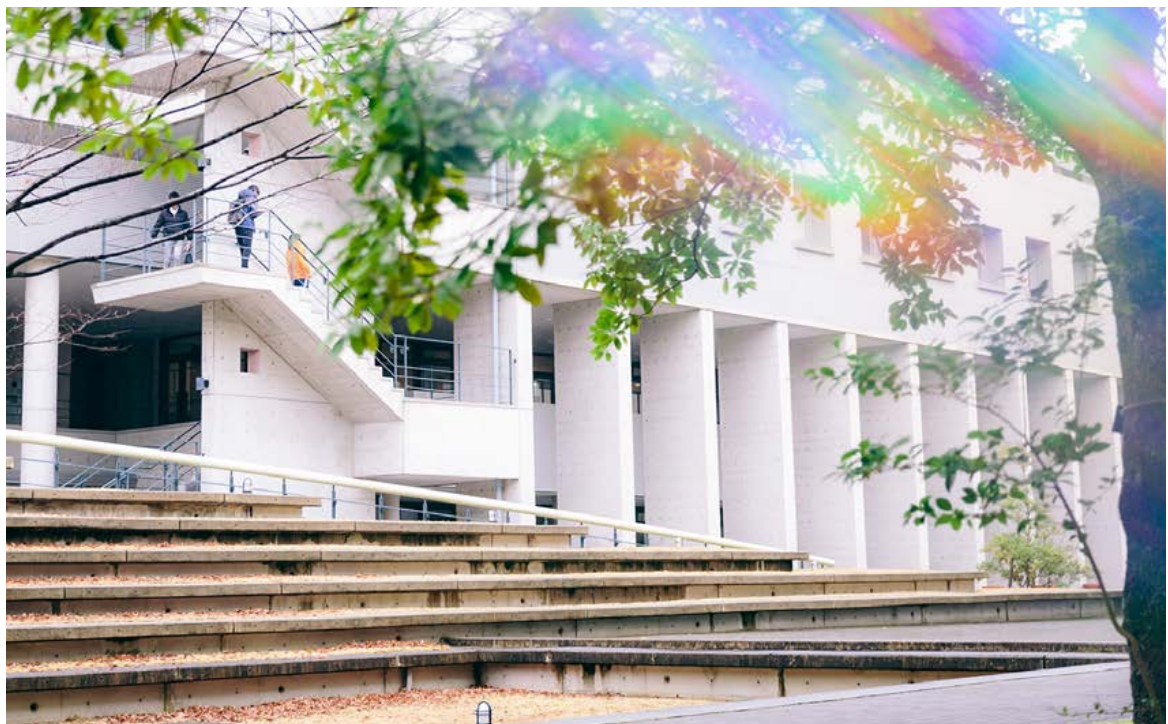
本学の「たから」は、約330年続くシヨールヴェ神父の教育理念に基づく女子教育とそれを象徴するルイ・シヨールヴェセンター、センターが保管しているアーカイブ資料、そして何よりも本学の卒業生と在学者、白百合の教育に携わるすべての人々である。2025年、本学は創立60周年を迎えるが、ルヴェヴィルで始まった女子教育のこころを、今後も引き継いでいきたい。



“なりたい自分”を発見する。



流通科学大学







University Current Review

大学時報

2024.11/NO.419



出会いがあふれる キャンパス

清水信年

流通科学大学学長

大学で過ごす時間には、出会いの機会があふれている。奥深い学問の世界、はじめて触れる多様な価値観を持つ人びと、気づいていなかった多くの社会課題、そして新たな自分自身との出会い――。

未知との出会いを経るたび、学生たちは成長する。出会った相手にも、少なからず変化をもたらす。そうした機会が一つでも多く生まれるようなキャンパスを実現することが、我々の務めである。

世界のウェルビーイングの 向上を目指す教育

— 未来のグッド・アンセスターとなるために —

西本 照真 武蔵野大学学長

はじめに

本学は、2024年、創立100周年を迎えている。大学が周年事業に取り組むことの意義は、大学の建学の精神とそれに基づく歩みを再確認し、現在バトンを受け継いで走っている大学構成員が未来へとバトンをつなげる営みを意気高く加速していくことにある。いわば、その大学の過去と現在と未来が出会う時と位置づけることができる。

100周年を迎えた今、武蔵野大学の学祖高楠順次郎博士の言葉が思い起こされる。「我々が努力して成し遂げたものは、そのまままで終わりを告ぐべきものと思うのは間違いである。この後に為すべきものの第一歩である」。本稿では、本学100年の歩み、とりわけこの30年余りの歩みを振り返り、「この後に為すべきもの」についても思いをめぐらせてみたい。

1. 総合大学への100年の歩み

学校法人武蔵野大学は、世界的な仏教学者・高楠順次郎博士が関東大震災の翌年、焼け野原となった東京の築地本願寺に、本学の前身である武蔵野女子学院を創設したところにはじまる。開学当初から女子大学の構想を描いており、仏教主義女子大学の創設趣意書には、「女性の人格完成の為、仏教主義女子大学を帝都に創設する」とある。第二次世界大戦後、ようやく1950年に短期大学、1965年に4年制の武蔵野女子大学となった。

その後の60年余りの歩みの中では、とりわけ1995年以降、大学改革が加速してきた。この30年の歩みをさらに二つに分けると、最初の20年は単科大学から総合大学への歩み、最近の10年は個性的でブランド力を備えた更なる発展を目指す歩みと位置づけることができよう。1995年に今の人

間科学部の前身である人間関係学科が文学部に設置されたことがその後の大学改革の起点になったということができようが、文学部一学部のみ体制から複数学部になったのは1998年の現代社会学部の開設による。2003年には「武蔵野女子大学」から「武蔵野大学」に校名を変更、2004年には男女共学化して総合大学への歩みが加速することとなる。薬学医療系の薬学部(2004年)と看護学部(2006年)の設置以降、教育学部(2011年)、人間科学部(2012年)、法学部(2014年)、経済学部(2014年)、工学部(2015年)、経営学部(2019年)の開設と続いていく。2012年の有明キャンパス開設もこのような総合大学への歩みの中に位置づけることができる。

ここ10年は、設置した学部・学科・大学院の教育研究の質保証につとめつつ、時代と社会のニーズにそった武蔵野大学らしいユニークな学部・学科の設置にも力を注いできた。2016年にグローバル学部、2019年には私立大学初のデータサイエンス学部、2021年には日本で初めてのアントレプレナーシップ学部、2023年には世界的なSDGsの取り組みを受けて工学部にサステナビリティ学科、そして100周年の2024年には世界初となるウェルビーイング学部を開設し、

13学部21学科13大学院研究科と通信教育部を擁する総合大学へと発展をとげてきた。規模的にも筆者が奉職した1997年当時は文学部と短大を合わせて4500人余りの学生数だったが、現在では通学生だけでも1万人を超えている。

このような大学改革の歩みは本学のオリジナルな歩みでありつつ、同時に日本や世界の未来に向けて時代を先取りした改革に取り組んできたともいえる。2023(令和5)年6月に閣議決定された、令和5年度～9年度における「第4期教育振興基本計画」では、総括的な基本方針・コンセプトとして、(1)2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成、(2)日本社会に根差したウェルビーイングの向上、の2つが掲げられている。本学では(1)が工学部サステナビリティ学科、(2)がウェルビーイング学部に対応する。また、同計画の16の目標の中でも、「目標4 グローバル社会における人材育成」はグローバル学部、「目標5 イノベーションを担う人材育成」はアントレプレナーシップ学部、「目標11 教育DXの推進・デジタル人材の育成」はデータサイエンス学部にそれぞれ対応しており、本学の改革が今後の国の教育政策の動向とも深く関係していることが確認できる。

2. 世界のウェルビーイングの向上を目指す

本学では仏教精神に基づく人格向上を建学の理念としており、「四弘誓願^{しぐぜいがん}」という仏の4つの願い、すなわち、「生きとし生けるものが幸せになるために むさぼり・いかり・おろかさに流されず この世界あるがままの真実に学び 人格向上の道をとともに歩みたい」という願いを根幹に据えている。「生きとし生けるものが幸せになるために」と願う仏教主義に基づく建学の精神を現代的にわかりやすく伝えるメッセージとして、2016年には武蔵野大学のブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」を発表した。学部・学科・大学院・研究所がこのブランドステートメントを心にとめて教育・研究に取り組み、学生も教職員も卒業生も、およそ本学に縁のある人々は、生涯、ハピネス・クリエイターとして生きていく。このような大学を目指したいという思いが様々な大学改革の原動力になっている。2016年開設のMusashino University Creating Happiness Incubation (通称：しあわせ研究所)の諸活動、2019年の「SDGs実行宣言」や2024年の「DEI推進宣言」に基づく諸活動もすべからず本学の願いから流れ出たものである。

さらに、昨年11月に再構築し、公開した学校法人武蔵野大学のグランドデザインでは、建学の精神をさらに現代的に具現化していくため「世界のウェルビーイングの向上を目指す」ことを重要な柱として位置付けた。設置校の特色ある教育研究を展開することで、ウェルビーイング社会の創造及び形成に貢献すること、世界規模の多様な難題に向き合いながら全ての人が豊かさを感じる社会を実現するには、物質的かつ量的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさや健康までも含めて幸福や生きがいを捉える「ウェルビーイング」の考え方がいよいよ大事になってくる。時代の変化を捉え、仏法の真理観を根幹として、根源的な苦悩からの解放を見据えつつ、科学や技術の知見・成果も取り入れた学際的なアプローチによって、幸せ・生きがい・安心・福祉・健康・平和など、人々と世界のウェルビーイングをデザインし、創造していく人材の育成、輩出を目指す教育が今後ますます重要になってくるであろう。本年度開設したウェルビーイング学部もまさに本学の建学の精神に基づく大学改革の次なる第一歩であり、学部のキャッチコピー「あなたにしかつけれない、しあわせがある。」は単に一学部の願いではなく、四半世紀後の2050年に向けて本学が目指

していく教育研究の方向性を象徴しているように思う。

教育振興基本計画だけでなく、国際社会においてもOECDの2030年教育ビジョンにウエルビーイングが明記されており、国際的にもウエルビーイングな世界を実現していくことの重要性がいよいよ高まっていくと考えられる。そこにおいて志向されていくウエルビーイングは、自然や地球環境、動物を後景に追いやった人間中心主義を超えていくものであり、文字通り生きとし生けるものすべてがそれぞれのいのちを存分に輝かせつつ、互いに「よりよく関係し合い」ながら「よりよくある」という意味でのウエルビーイングに近づいていくことを願わずにはられない。武蔵野大学は、ウエルビーイング学部のみならず、あらゆる組織を挙げて、このようなウエルビーイング世界をカタチにしていくことに取り組む人材を養成し続ける大学でありたい。

おわりに：未来のグッド・アンセスターになる

学校法人武蔵野大学が100周年記念事業として取り組んでいるプロジェクトの一つに「カンファ・ツリー・ヴィレッジ・プロジェクト」がある。カンファ・ツリーとは、クスノキ(楠)、本学の学祖高楠博士の苗字に因ん

だプロジェクト名であり、「本学の建学の精神であるブツダ・ダルマ(仏法)の根本をふまえ、現代世界の諸課題の解決に向けダルマ(法)の意義と貢献の可能性の論究及び提言等に取り組み、もって世界の平和と安穩のために寄与する」ことを目的としている。そして、この目的に集う人々のヴィレッジの中心には次の問いを置いている。

“How can we become better ancestors?”

いかにして私たちはよりよき祖先になれるか

100年後、またさらに先の未来世代にとって、私たちはいかにしてよりよき祖先になれるか。名もなき祖先から受け継いできた自然や智慧を、私たちはギフトとして受け取っている。私たちは何を未来へ贈ることが出来るか。私たちが祖先となる未来世代の生きる世界を想像し、今どう生きるべきなのかを見つめ語り合うとき、対立を生む分別を超えた道が見えてくるのではなからうか。本学の100周年のキーマッセージは「響き合って、未来へ。」である。この100周年という時が、よき祖先の声に耳を澄ましつつ、100年後の未来に向けて私たちが自身がよりよき祖先となっていくことを誓い、意気高く歩み出す場でありたい。